



「楓の風」らしい看護の取り組みを発信

KAEDE TIMES 2026

在宅生活を支援するー私たちの試行錯誤



ー在宅を支える全てのみなさまへー

私たち、「楓の風」スタッフが、どのような想いで在宅支援をしているのかを、一人でも多くの方に知っていただきたい！と思い、

「楓の風」らしい取り組みをご紹介する、ニュースレターをはじめました！

ee

Case 7

2026 Vol.7

がん末期の在宅療養では、**ご本人の思いが揺れ動く瞬間**ことがあります。

「最期をどこで迎えたいか」「家族にどこまで負担をかけたくないか」——その答えは、病状の変化や家族の状況、季節や生活環境によっても変わります。

今回の事例は、年末年始という支援体制が限られた時期に退院されたA様。本人・家族双方の葛藤を理解しながら、医療者がどう寄り添い、どう意思決定を支えるかを考えさせられるケースでした。

ケース

年末年始の支援体制が限られた時期、それぞれの葛藤に寄り添いました

A様はすい臓がんを患っておられ、診断後まもなく治療適応がなく、疼痛コントロール目的で訪問看護が導入されました。

治療方針に温度差があるまま、在宅療養と通院を並行して進めることに。

ご本人・ご家族様双方が、時間経過とともに、揺れる想いを抱えておられました。

<介入当初>

本人：「最期を家と決めているわけではない」

家族：「少しでも良くなるなら治療を…」

<徐々に…>

本人：「迷惑をかけるけど…**家にいたい**…」

家族：「**施設の方が安心かもしない**」

具体的な関わりと支援の姿勢

① 意向の“その時点”を丁寧に確認する

「家にいたい」という本人の気持ち、「介護が不安」というご家族の本音

これらは日々変わるため、**訪問のたびに丁寧に確認を続けました。**

② 症状悪化に迅速に対応

腹部膨満・便秘・疼痛増強のたびに緊急訪問。摘便・薬剤調整・医師共有を即時に実施。

医療体制が限られた期間でも「待たせない」ことが心理的安心に直結しました。

③ 家族の葛藤に寄り添う

“なにが正しいか”ではなく、「今までの頑張り」「限られた時間」「後悔しない選択」といった価値に焦点をあて、**お気持ちを整理できるよう支援しました。**

私たちの気づき

A様はその後、ご家族に見守られながら自宅で旅立たれました。

「苦しまなかつた」「やりたいことはできたと思う」

——ご家族の言葉は、**最期の時間がその人らしくあったことを示していました。**

ご意向は、病状・家族状況・時期によって変化します、それに気付くには、**日々の対話が大切**だと感じています。最期の選択が揺れるのは自然なことだからこそ、その揺れに**最期まで寄り添える**ことが、楓の風の在宅チームの力だと実感しました。

